
愛の形

シュガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛の形

【Nコード】

N7616P

【作者名】

シュガー

【あらすじ】

ジュラル帝国の皇帝ラウディアのもとに嫁いだレイシア。

愛されることはないとなりながら嫁がなくてはならなかった彼女に待っていたのは、皇帝からの冷酷な仕打ち。皇帝にとって彼女は次代を産み、貴族達の面目を立たせる為の道具でしかなかった。

皇帝には庶民出の寵姫がいるが、寵姫に惑わされているとしか思えない宰相は皇后にレイシアを据えることで寵姫を牽制し、レイシアと子を守り続けることになる。

世継ぎを産んだ所で二人の関係が変わることはなく、二人の距離は

離れる一方であつた。

思い出すのは・・・（前書き）

少し一話の内容を付け加えました。
すみません。

思い出すのは・・・

ジュラル王城の南にある太陽の宮の庭園に一人佇む女性。

彼女の名はレイシア・イル・ジュラル。

この国の皇后となって10年の歳月が経った。

溜め息が自然と零れる。

そんな彼女の元へ一人の男性が歩み寄る。

「皇后陛下、このような夜更けに外へ出ては危険でございます。」

困ったように自分を諫めるのは昔から変わらない。

宰相のフレデリックは皇帝陛下の右腕であり、私が最も信頼する者である。

「あなたは、いつも私を見つけてくれるわね。」

「陛下は、いつも私を困らせてくれますね。」

お互いに気を許し、微笑み合うという穏やかな時間は王城に置いて数少ない。

そんな時間を過ごせる相手が王城にいて良かったと心から思える。

私は彼を見ずに月を眺めながら話し掛ける。

「あなたが居て良かったと心から思っています。」

「陛下…」

苦い顔をするあなたを見るたび私の心は痛む。

「そんな顔をなさらないで下さい。私は幸せです。誰もが羨む皇后の位を得て、世継ぎの皇子を産み、皆に助けられています。」

彼は目を伏せて言った。

「違う：あなたは皇后という地位に幸せを感じるような者でないと私は知っている。知っていたのに、私は……。」

「人の心は、どうしようもできないわ。陛下が寵姫を愛していることも初めから承知の上で嫁したのよ。義務だとしても子を得て、母となる喜びを知ることが出来たのだから私はそれで十分なのです。」

彼女が微笑み、少し声音を落とした。

「私が心配なのは皇子のことです。私と陛下が疎遠なことも原因の一つかも知れませんが、皇子は最低限にしか陛下に会おうとなさらないと聞きました。昔は、そういったことがなく陛下の所へ遊びに行かれていたので安心していたのですが、陛下と不仲になれば良からぬことを企む者も出てくるでしょう。」

今年10歳になるアルディア皇太子殿下は勤勉で武術の稽古も怠らず、また穏やかな性格なため人望がある。幼くして王の素質が垣間見えると重臣からも民からも将来が楽しみだと言われている。そんな皇子が周りに唆されることは無いと思うが陛下と距離を取っているのは確かである。

「心配はございません。皇子も陛下に甘えられる年頃では無くなったでしょう。父と子の関係は年齢とともに複雑になると聞きます。」

「私はアルディアの父親という存在を失念しておりました。私の眼に映るのは皇帝陛下の背中のみで夫婦としての関係が結ばれていなかった。政略結婚では夫婦仲など関係なく子どもさえできれば、それで良いという考えに私も染まっていたのかもしれませんが。今でも思い出すのは、始まりの日です。」

レイシアは過去を振り返る。
全ての始まりを…。

必ずしも結婚が幸せとは限らないことを知っていた。
幼い頃から言われ続けた母の言葉が何度も頭の中を駆け巡る。

私は、あの日婚姻を結んだ。
婚姻は家を繁栄させる為の貴族の義務。
そしてまた王族に嫁ぎ、貴族と王族の間に繋がりを作ることにも義務である。
富と権力を引き換えに貴族は義務に縛られる。

私は、自国の皇帝のもとへ嫁いだ。
この婚姻が幸せに繋がることはない而知りながら、嫁がなくてはならなかった。

両親は泣いていた。
華々しい日に涙に濡れる瞳で私を見つめた。
その涙が決して喜びからではないことを私は知っていた。

それを知りつつ、気付かない振りをした。
言葉にしてしまえば、「行きたくない」と泣き叫んでしまったかも知れないから。

そうすることは許されなかった。

これは守るための婚姻なのだから。

私は、ジュラル帝国の五大公の一つローゼディクス公家の娘。
国の中枢たる貴族の義務を心得、放棄することはできなかった。
あの日、陛下との誓いの場で愛を誓うのではなく、陛下に愛される
ことはなくとも自分の幸せを見つけてみせようと誓った。

私の選択は正しかったのだろうか？

またフレリックも過去へと記憶を辿る。
自分の選択は正しかったのだろうか？。

思い出すのは・・・（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。
拙い文ですが、これからもよろしく願います。

皇帝ラウディア

この世界はサラビアと呼ばれ三つの大陸が立ち並んでいる。その中で一際大きいディアと呼ばれる大陸にジュラル帝国がある。

ジュラル帝国は今でこそ大国として諸国を牽制しているが、元々は王国として周辺国と同盟を結んできた中小国の内の一つであった。今から70年程前、大陸全土を襲った疫病により死者が続出し、大陸全土で国が傾き荒廃していくことに誰もが嘆き苦しむ状況下であった。その状況下の中、誰もが諦めかけていた時にジュラル国にて疫病に対する免疫剤が開発され、人々を病魔から守ることに成功した。これを機にジュラル国は諸国から一目置かれる存在となる。この免疫剤の効果によって人々は救われ、各国は荒廃してしまった国の立て直しに取り掛かるが、人手不足もあり容易に進めることが出来なかった。そこでジュラル国と同盟を結んでいた五つの周辺国と合併し協力体制で国の立て直しを進めることとなった。大陸の中で一番早く力を取り戻すことができ、大陸で大きな力持つことにもなったのである。

同盟を結んでいた五つの国は、公家こうけと呼ばれジュラル王家の次に権力を持っており、王家と婚姻関係を結ぶことで結びつきを更に強化していった。

以上がラウディアの曾祖父の時の話である。

ラウディアが王位を継承をしたのが五年前の18の時である。情勢は安定しているとはいえ周辺国との関係は良好とはいい難かった。ラウディアは、前皇后ロザリアの子であるため嫡子として早くから

王位継承者としての教育を受けることになる。ところが前皇帝には側妃が五、六人居り異母弟がいたため後宮内で暫し謀略がめぐらされる。返り討ちにするのは言うまでもないが、ラウディアの中に貴族の女に対する憎悪が芽生え始める。また自分の母が父に執着をする様は見ているだけで嫌悪感を抱き、他の側妃を罵る様子に皇后としての威厳は何もない。ラウディアの目には母としての姿は無く、哀れに打ち捨てられ執念に駆られた唯の女にしか見えなかった。

父の死後、自分を利用することは分かっていたので病に倒れ呆気なく旅立っていったのは不幸中の幸いであった。異母弟はともかく実の母を死に追いやるのは後味が悪い。そのすぐ後で父が亡くなったのは母上の道連れにでもなったのではないかとの噂があったが、あの執念深さでは信憑性があるなどラウディアは思った。父が亡くなったお陰で生き残っていた側妃も城から追い出せ、ラウディアは清々としていたが厄介な問題が持ち上がり始めることになった。

ラウディアの正妃問題である。

ラウディアは、娘や孫について熱く語る貴族達を冷めた眼差しで見やり一刀両断してきたが年が経つにつれ、この話題を回避することが難しくなってきた。

皇帝として即位したと同時に宰相となった五つ上の幼馴染フレデリックは何も言わないが「早く決めてくれませんかね。大臣や貴族共が煩くて執務の邪魔なんです。毎日毎日飽きもせず執務室に来られ、延々と語った挙句、肖像画を置いて行かれ処理に困ります。」という無言の訴えがわき出ているのが分かり、それも鬱陶しくて仕方がなかった。

そこで城を飛び出し気分転換に遠乗りに出掛けたことで、寵姫となるマリエッタと出会うことになる。

ラウディアは初めて感じる思いに戸惑いいつも振り回され、周りが見えていなかった。

宰相はこの時遠乗りを阻止できなかったことを死ぬほど後悔する羽目になり、寵姫の裏の顔をはがそうと奔走していくことになる。

皇帝ラウディア（後書き）

次は、ラウディアとマリエッタの出会いの予定です。
レイシアは、その次くらいの予定のつもりです。

ラウディアとマリエッタ（前書き）

お久しぶりです☆

ちょっと長くなりましたが、よろしくお願いします。

ラウディアとマリエッタ

時は一年半前に遡る。

首都ルーベの北にあるアルザス山へ遠乗りに出掛けた時のことだった。

ラウディアの機嫌は朝から急降下であった。

皇后を決めろという煩い家臣を撒いて、城から気分転換に馬を走らせるのはここ数年の日常生活の一部となっている。帰ればフレデリックの説教と山と積まれた報告書が待っているのは分かっているが、我慢にも限界があるのだった。

（私は父上のようにはならん。王としてはそこそこであったが、女にだらしがないのは悩みの種だったな。女が出来れば王女として使い道もあるというのに、なぜ産まれてくるのが男ばかりなのか……。お陰で、こっちは処理するのが大変だったし、子どもに関心も無かったため迷惑な父親でしかなかったな。皇后など誰がなろうと同じであるというのに、欲に眩んだ女など汚らわしいし御免だ。）

ラウディアは荒んだ心情を抑えようと泉の方へと馬の足を進めた。山の入り口から遠くはない場所に泉があり、ラウディアの先祖に当たる王の一人が生涯の愛を誓ったと言われる女性に出逢った場所であるとの言い伝えが残っている。

ラウディアは、その言い伝えが真実であることを知っていた。王家の人間に愛などないと信じていたが古くからの日記や史実に残っている。幼い頃は憧れた。愛に溢れた王家の時代に自分も生まれたかったと。そうすれば自分の心は満たされると思っていた。母は父だけを見つめ、父は誰にも見向きしなかった。家臣も使用人も王子としての自分しか見なかった。フレデリックだけだった。自分を叱り、諫め、向き合う者は……。あの頃は寂しいと思ったが、今ではその全てがくだらないように思えた。

泉まで後少しの所で、茂みの揺れに気付いた。

茂みのそばに近付くと女が蹲って泣いていた。

声を押し殺して泣いている女は俺の存在に気付いていなかった。

俺は、女の泣き顔は氣に入らず、不快になるため女に声をかけた。

「（泣くな、鬱陶しい）何を泣いている」

女は顔を上げず、ただ泣いている。

「いい加減にしろ。泣くなら家で泣け。息抜きに出た意味がなくなるではないか。俺を不快にさせるな。」

厳しい口調で話しかけると女が俺を睨みつけた。

「あなたに何が分かるの。見ただけで裕福だと分かるあなたに貧乏人の気持など分からないでしょう。家で泣くことが出来ないから、ここまで来たのに……。なぜ後から来たあなたに責められなければならないの。」

厳しい眼差しで自分を睨みつける女は生まれて初めてだった。

僅かに興味を持った俺は事情を聞くことにした。ほんの気まぐれであつた。いくら自分の民といえど手を差し伸べるつもりはなかった。ただ聞くだけ。無礼であっても俺を睨みつける女が珍しかったから聞いてやることにしただけ。

女は言う。

「姉が病気で命が危ういのです。両親を早くに亡くしたため私の親代わりになって一生懸命働いてきた姉の前で泣けるとお思いですか。姉は優しいから私が泣けば悲しんで自分を責めるのは分かり切って

います。だから此処にいる。」

女の言う事が理解できなかった。

女は泣く。すぐに泣く。己の不幸を憐れんで人の同情をかおうとする。人を憐れむことで自分に酔う女もいた。それが女だと思っていた。

この女は違うのだろうかと思った時、女はとんでもないことを言い出した。

「そこまで聞いたなら私を売って、そのお金を薬代にして姉に届けてくださいませんか。」

女は呆氣にとられる俺を無視して喋り出す。

女一人では纏まったお金は得られない：などぶつぶつと言っている。

俺に：皇帝である私に人身売買をしろというのか…。その前にこの女は身売りの意味をきちんと理解できているのか。

「自分でやればいいだろう。身売りでも何でも。まあ、そんな金で得た薬など嬉しくはないがな。」

「私は姉が助ければ良いのです。私のせいで姉は貴重な少女時代を私の世話で奪ってしまったのですから。」

項垂れる女を見て私は聞いた。

「おまえの名は何と言う？」

女は渋々といった様子で答えた。

「マリエッタ：マリエッタ・エターナル」

俺は笑った。女に対する興味と退屈しのぎのために女に囁いた。

「俺が面倒を見てやる。」

この一言が俺と周りを狂わすことの原因となる。

俺は皇帝、この帝国の権力者。

だが所詮、城に囚われ、王冠に囚われた者でしかない。
外の世界を詳しく知らない俺は踊らされる。

この当時、娼婦や下心ある女達の間で流行っていたお遊びを知らず
俺は彼女に囁いた。

知っていれば、そして周りに耳を傾けることが出来たらラウディア
とレイシアの関係は変わっていただろうか。

だが全ては仕組まれ、齒車は周りを巻き込み廻っていく。

誰も気づかない。陰の笑みを見せる者がいることを…。

ラウディアとマリエッタ（後書き）

誰が陰で笑うのかは、まだまだ先の展開になるかもしれません。
今後ともよろしくお願いします。

宰相フレデリック

宰相となって4年。

忙しく殺伐とした日々ではあるが、充実した毎日を送っていたのではないかと今なら思える。

フレデリック・イム・グローリア

グローリア公家の当主であり、宰相でもある彼の名を知らぬものはジュラル帝国内には一人もないだろう。

グローリア公家は5公の一つである為、由緒正しい家柄である。

帝国内での権力は皇帝、ローゼディスク公家の次に力を持っている。フレデリックの母エレオナは前皇帝コルトパルディアの同母姉であり、とても仲の良い姉弟であったことから王家と深い繋がりを持つ。とはいえ姉弟仲が良かったが為に皇后との関係は良くなかったと聞いている。皇后がグローリア家を煙たがったこともあり、その当時皇太子であったラウディアには10歳でお側に上がるまで会うことは殆どなかった。

フレデリックがグローリア公家の当主となったのが八歳の時である。両親が領内の視察中に馬車による事故のため亡くなり、跡を継ぐこととなった。一夜にして天涯孤独の身の上になったフレデリックを支えたのは、グローリア公家と親交のあったローゼディスク公家の当主ロベルトである。成人を迎える18まで後見人として色々と力を貸してくれたからこそ今の自分がある。フレデリックにとってロベルトは最も尊敬し、自分の目指すべき目標でもあった。宰相となっても自分はまだまだロベルト様には敵わないと日々精進しているが、彼は今皇帝が持ち帰った種によって悩まされる毎日を送ってい

る。

皇帝が種を王宮に持ち帰って、もうすぐ一年が経とうとしている。初めのうちは大臣や貴族達が驚きはしたものの皇帝が女性に興味を持ち始めたのは良い傾向として静観する姿勢を取っていた。ところが半年がたった頃になっても傍に置き続けているため多くの者が焦りと不満を持ち始めるようになった。初めのうちはフレデリックも皇帝の肩を持って貴族達を諫めてはいたがマリエッタに会ったことで考えを改めた。マリエッタに会わせてもらえたのが、連れ帰って半年が経った時であった。おそらく貴族の不満が出始めると予測してのことだろうが、フレデリックはマリエッタに対し好感が持てなかった。

何か違和感がある。

宰相としての勘が分からないが胸にしこりがあつて、すっきりしないまま会談を終えた。

会談中に垣間見たラウディアの表情が和らいでいることからマリエッタに対し心を許していることが分かる。

女性不信であるラウディアにとって良い傾向だと思うし、長年ラウディアを見守ってきた自分としては出来ることなら祝福してあげたい。マリエッタは平民出身ではあるが身分はどうとでもなる。だが、何かが危険だと訴えかける。おそらくラウディアはマリエッタを皇后にと考えている可能性が高い。自分を後見人を選ぶとするだろう。公家の一つであり、当主である自分が適任者であるとラウディアは踏んでいるだろう。

私はそれに従えない。初めて主君の意に反することをする。

自然と拳に汗が滲む。

ラウディアは裏切られたと思うだろうか。

それでも一つだけはっきりしていることがある。

不思議と確証はないのに確信している。

ラウディアはマリエッタと一緒になくても幸せは一瞬であると…。

幼い頃、父に言われた言葉を思い出す。

『直感を信じなさい。グローリア家の強みの一つだ。』

何としてでも阻止をしよう。

自分の直感がそう告げるから。

これがラウディアの為だと信じて前に進もう。

こうしてフレデリックの闘いの日々が幕を開けた。

決意と誤った計算

フレデリックがラウディアの意に反する決意をしてから一ヶ月後、午前の王侯貴族会議で恐れていたことが起こった。

いつものように王は会議室内にある一段上になった所にある椅子に座り、各国の情勢変化や国内の変化などの話を各大臣から話を聞いていた。

何事もなくいつものように会議が終わると誰もが思っていた時、皇帝の一言に各大臣貴族が騒然となり会議は紛糾した。

何も聞かされていなかったフレデリックも暫し呆然とすることになった。

この事態をいつも通り平然としていたのは唯一人ローゼディスク公家の当主だけであった。

「余はマリエッタ・エターナルを皇后に据えたいと思っている。」

皇帝の言葉に皆は呆然とするも忽ち意識を戻し、皇帝を諫め始める。

「陛下！貴族ではない、ましてや素姓の知れぬ平民を皇后に据えるのは反対でございます。」

「そうです。このままマリエッタ殿を寵姫とし、皇后は別にとられるのがよろしゅうございます。」

財務大臣を筆頭に次々と声高に皇帝に告げる。

皇帝は黙って聞いているが、明らかに怒気を振りまいていた。

皇帝は、ふとフレデリックを見る。

何も言わない彼に皇帝は声を掛ける。

「宰相、そなたはどう思う。」

場内の視線が一気に集中したことをフレデリックは肌で感じた。
ラウディアは私が反対すると予想しているのだろうか？

予想していないに違いない。

私が身分に拘る者ではないことを理解しているから。

意を決して意見する。

「私も反対でございます。」

はつきりと、きっぱりと、眼を逸らさずに…。

瞬間、皇帝の眼が見開かれる。

言葉を失くし我に返った皇帝は彼に問う。

「なぜだ？」

「彼女が皇后にふさわしいと思えないと判断したためです。」

彼は音を立てて椅子から立ち上がる。

誰もが皇帝がフレデリックに殴りかかると思った。

しかし、皇帝は皆の横を通り過ぎ会議室から出て行った。

フレデリックは急いで後を追う。

彼は見た。

立ち上がった皇帝の眼に怒り以外の傷ついた心を見つけてしまった。

急いで追いかけると皇帝は会議室の回廊を抜け、執務室に行く途中にある温室の中にいた。

前皇帝が愛していた温室であり、現皇帝となってからも前と変わら

ない風景が維持されていた。

ラウディアはフレデリックに気付きながらも背を向けたまま立っていた。

長い沈黙の後、ラウディアは口を開く。

「おまえは、私の味方だと勘違いしていたようだ。なぜ彼女を否定した！身分に拘るおまえでないことは分かっている！なぜだ！」

話しているうちに興奮してきたラウディアは声を荒げる。

フレデリックは黙ってラウディアの言葉を受け止める。

ラウディアが言葉を全部吐きだした後、フレデリックは告げた。

「何を言われようと私の意志が変わることはありません。彼女は皇后には相応しくありません。」

「おまえまで他の貴族と同じような考えを持つようになったか！」

「いいえ、陛下。私はおのれの直感を信じているだけです。陛下が女性を傍に置かれることを嬉しく思っているのは確かです。しかし彼女には解せない点が多くあります。確たる素姓が何一つ分かっていない女性を皇后に据えることは危険です。」

「私が女に対し心を開いたということは彼女が信頼に値する者だからだ。なぜそれが分からない。」

「彼女は陛下の理想そのままかも知れません。欲に目の眩んだ言動はしない。けれど、それだけです。それだけでは皇后に相応しいとは言えません。彼女には皇后として大切なものが欠けている。」

フレデリックの冷静な言葉にラウディアも冷静になる。

「欠けているものとは何だ？ 身分でないなら何だというのだ。」

「陛下が気付くべき点であります。私からは何も申し上げることはありません。陛下は前に仰いました。皇后の地位に何の意味があるのかと、皇后の地位欲しさに欲に目の眩んだ女はいらないと。でしたら彼女を皇后に据える必要はないでしょう。彼女自身が皇后の位を望む女性でないことは陛下の信頼さから分かりますし、皇后は他の者が納得できる者を置いて世継ぎを産めば彼女を傍に置いて周риからの非難は避けられるでしょう。」

ラウディアは凶星を指されたのと同時にフレデリックの頑固な態度を見て、これ以上言葉を重ねても意志が変わらないと判断する。

しかし、このまま引き下がるのも面白くないラウディアはフレデリックに命令する。

「ならば、そなたが探し出せ。そなたのいう皇后に相応しく皆が納得できる者を推薦すれば、その者を皇后にしよう。その者にとって幸せかは分らんが、世継ぎを産めるのだ。泣いて喜んでしがみつくであろう。」

ラウディアはフレデリックを残し足早に温室を去って行った。

フレデリック突然の命令に驚くも、マリエッタが皇后になる可能性が低くなることに安堵したと同時にいつの間に温室にいたのか声を掛けられて驚いた。

「陛下に冷静に意見したのは良いが、そなたは計算ミスを犯した。」

後ろを振り向くとローゼディスク公家の当主ロベルトが立っていた。

しかし計算ミスと言われ何のことか分からないフレデリックは尋ねた。

「ミスとは…？」

ロベルトはほほ笑みを見せたが、目が笑っていなかった。そして突如としてロベルトの発する気によって背中に緊張が走る。

「頭の切れる宰相でも分からぬか？陛下は、誰もが納得する者を皇后にすると仰られた。そなたは寵姫を皇后にする阻止で頭が一杯で、誰が皇后に相応しいかまで計算していなかった。誰もがということとは王侯貴族が納得するに相応しい身分でなければならぬということだ。当然地位の高い王族、公家からであろう。」

そこまで言われて頭が真っ白になった。震える手と口に力を込める。

「あっ…今現在相応しい姫は…。」

先の言葉が続かない。

言葉を失うフレデリックをロベルトは見つめ、言葉を続けた。

「陛下の従兄は、そなただけ。よって相応しい王族の姫はいない。次は公家。五つの公家のうち3つは既に嫁いで娘がおらず、残る二つのうち一つは跡取り娘しかいない。となると跡継ぎがいて、娘もいるのは…」

「「ローゼディスク公家」」

フレデリックは考えの足りなかった自分に後悔し、姫に対する罪悪

感に苛まれる。

始まりに向かって

何かが壊れていく音を聞いた気がした。

もう元には戻れないほどに粉々に砕けてしまった音を。

ローゼディスク公家の王都にある邸宅の一室に主の娘レイシアはいた。

「姫様、グローリア公が今、旦那さまとお話をなさっているそうですよ。」

本を閉じ、紅茶を運んできた亡くなった姉の乳姉妹ラーナを振り返る。

「フレック兄様が？」

「ええ。旦那様と難しいお話をされているそうですわ。しばらくしたら姫様をお呼びになるそうです。」

「私を？お父様とのお話なら国に関わることでしょう。」

ラーナは何やら考えて、思い出したように手をたたいた。

「恐らく、陛下と寵姫のことではないかと……。城では今、陛下のご結婚に対する噂で持ち切りだそうですよ。」

レイシアも陛下と寵姫の噂は耳に入っていた。

あの女嫌いの陛下が唯一目に留めた女性。

でも、フレック兄様は寵姫を気に入らず陛下と対立しているとの噂もつい先日に入ってきた。

ローゼディスク公家に回る情報は早い。ローゼディスク公家の秘密の一つのお陰だ。

今は家を留守にしている兄ジェラルドは外交官として他国に名が広まるほどの腕前で他の国を牽制している。故に皇族であろうとローゼディスク公家に敵対する者はいなかった。

レイシアは今の皇家の状態をお父様が静観している訳がないと考えた。

お父様は皇家に対し口を出すことは殆どない。しかし国に関わるとなれば陛下を敵に回してでも行動に移す。普段は物静かで温厚だが、内に牙を隠し持っている。それがローゼディスク公家の当主の姿だ。何かしらの策をフレック兄様と講じているんだわ。

でも、呼び出すということは私にも関わりがあると取って良いのかしら。

何か良くないことが起きている。

国にとってか。

家にとってか。

私にとってか。

急に襲う寒気に震えながら、呼ばれる時を待った。

始まりに向かって（後書き）

また少し付け加えるかもしれませんが、よろしく願います。

父からの呼び出し

「おまえと陛下との婚礼が決まった。」

部屋に入るなり、父から聞かされた言葉に、一瞬、私の動きは止まる。

あれから一刻程で、父からの呼び出しが掛った。

フレック兄様は帰っており、挨拶も出来なかった。

父の言葉で確信する。

フレック兄様は、私に会いづらかったのかと。

「かしこまりました。」

父に一礼し、了承の意を口にする。

「おまえは、何も聞かないのだな？」

父は娘の様子に、苦笑いする。

「私は、ローゼディスク公家の娘。全て理解しております。」

我が家は、裏部隊（隠密）を沢山抱えている。ローゼディスク公家が、帝国に吸収される前は、裏の情報収集で、各国の弱みを握り、国を守って来た。無論、情報収集以外のこともしてきたが……。帝国に吸収された今は、裏部隊は帝国に恭順の姿勢を見せ、仕えている。しかし、当時、帝国に譲渡したのは部隊の半数で、残り半数は、今でも公家に仕えている。裏部隊は秘密組織で人数の把握は陛下でも不可能である。また、譲渡したとはいえ帝国の裏部隊の第一の主は、ローゼディスク公家の当主である父に他ならない。

私自身も7歳の時から専属の隠密を抱えている。

父から託された者もいるが、自ら才を見出し、抱えた者もいる。

味方を作るには自らが行動し、見極めなければならない。

真の味方とは、自ら得るために行動してこそのものである。

当主である父も、私とは比べものにはならないほどの巨大な情報を持ち、背後で操っている。

父は娘の様子を見て、満足げに微笑む。

普段の父は家庭的で温かいが、国に関わることに關しては、私情をはさむことはない。

父の眼を見る限り、本気で獲物を狩るつもりでいるようだが、どこか引かかる。

今はまだ、静観するという姿勢だ。

それに父は、どこか、この状況を面白がっている。

父は、傍から見れば、王家に誰よりも忠誠を誓っているようにも見えるし、私自身もそう思っていた。

陛下も父のことは、ある程度、信賴していると言っても良いだろう。だが、今回のことを父が、何も陛下に進言せず、見守るのは何故なのか。

その理由が見当たらない。

王家の混乱を望んでおられる？とも考えたが、父に、そうしなければならぬ理由が見つからない。

「寵姫の裏におる者は中々のやり手だ。尻尾を出さぬゆえ特定が難しい。今回は長期戦となるだろう。そなたは持てる力で、人を惹きつけよ。陛下は子さえできれば、お前を遠ざけるだろうが、我が家にとって、そこは問題ではないな。むしろ遠ざけてもらった方が動きやすいな。そなたの身と産まれるであろう嫡男は我らローゼディスク公家を守り通そう。決して、寵姫に皇后の座を取られてはならぬ。我らは、陛下の為には動かぬが、国の為だけに動く。そなたの行動一つ一つが民へと繋がる。そのことを忘れてはならぬぞ。」

「肝に銘じます。」

一礼し、部屋を出ようとした時、父は呟いた。

「すまない。」

その父としての一言で、レイシアの心に迷いは無くなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7616p/>

愛の形

2011年8月17日14時53分発行